

けられるとは……と憤激したことにもしばしば遭いました。

【執筆者の紹介】

住 所 安芸郡府中町本町三一五一四

生年月日 大正八年十一月十日

昭和七年三月 大連伏見台尋常高等小学校卒業

昭和十二年三月 大連工業学校機械科卒業

昭和十二年四月 木谷製作所入所

昭和十四年十二月 現役 入隊

昭和十六年六月 除隊

昭和十八年四月 関東洲工業会技能試験合格

昭和二十年五月 応召

昭和二十年十二月 シベリア抑留

昭和二十三年十二月 復員

昭和二十六年一月 東洋工業株式会社入社

昭和五十一年十二月 〃 停年退職

昭和五十三年十二月 〃 二年間嘱託

(広島県 山田 浩三)

入隊・転進・

満州・シベリア抑留

岡山県 土居 一志

大正十年十二月十六日 広島県瀬戸田町林生まれ、

尋常高等小学校卒業。家業・農業、六男一女の四男と

して生まれ、岡山県玉野市の三井造船に昭和十一年四

月より昭和十七年十二月の入隊まで勤務。

昭和十七年十二月十日、本籍地西部第二部隊に十七

年現役兵として入隊してからの一週間は、毎日、兵器・

被服などの支給で、教育はわずかな時間で、各個教練

を駆け足で受けた程度だった。

十二月十六日、最後の編成が達せられた。まぎれも

なく中支藤部隊、要員約八百名くらいであった。当日

は最後の面会として、広島へ親兄弟五人が面会に来て

最後の別れとなった。中支派遣軍から四中隊の初年兵

受領に中支より来ている下士官二名に引き渡された。

十二月十七日午後十二時、いよいよ野戦に向かって出発することになった。補充隊を出発して、徒歩行軍で広島駅へ、そこより列車で。十二月十八日、下関で列車を下車して、関釜連絡船で釜山へ渡り、釜山よりまた列車で朝鮮半島を横断して、鴨緑江を渡り満州国へ。奉天を経由して満支国境の山海関で下車して、休憩をとる。再び列車を乗り換えて、大平原を一路終点の浦口までひた走りに走った。浦口より連絡船で揚子江を渡り、南京の兵站宿舎に到着した。広島を出発して一週間くらいの輸送期間であつたらうか。南京では旅の疲れを癒すことと、南京攻略時の大激戦のあつた場所（中山門）などの見学を兼ねての行事が行われた程度で、少しは休養をとることができた。南京からは船舶輸送で揚子江を上り漢口に到着した。

昭和十八年一月二日のお正月であつた。宜昌まで（五百キロメートル）の所を約三十キロの重量を背負つての行軍は大変であつたが、張り切つていたこともあり、お互い励まし合つて落伍する者はいなかつた。

我々の第四中隊警備地は宜昌の対岸で、揚子江を渡

河して最後の目的地である汪家營の第四中隊初年兵教育隊には夕方疲れ切つてようやく到着した。

三月になると、輸送中の疲れ又は教育訓練の厳しさから発病し、入院患者が続出。また体の弱い人が特別訓練隊に配属され、二割くらいの兵隊が少なくなつていった。元氣な兵隊だけになると訓練は一層厳しくなり、ピンタの飛ばぬ日はないくらい激しいものだった。

訓練も終わり、自分たちの初年兵教育はすべて終わった。自分は六月より連隊本部の下士官教育隊に行き、六カ月間で教育を完了した。

それから南京の下士官教導学校に行き、六カ月間のきびしい教育を受け、卒業して、三十九師団四中隊に復帰し下士官勤務兵長になり、中隊の命令受令及び初年兵の宿舎建築作戦の任務につく。

昭和十九年二月伍長に任官する。

敵機に追われるように、襄樊作戦から帰還して、自分は初年教育より帰隊して連隊は三分の一は残して転進となつた。

新設の歩兵第九十七旅団と交代した。その時点での

我が師団を中支三角地帯の海岸線に転用し、対米軍上陸作戦に起用するためだった。

この地を警備すること二年有半。その間は数十回に及ぶ敵の反攻をことごとく撃破し、大きな功績を樹立した。しかし反面、多くのわが友達が永遠にこの地に眠ってしまった。その冥福を心に祈り、また生死を共にと誓った残留の戦友に互いの武運を祈念しあいながら、最後の言葉を交わして訣別した。宜昌を発つとき本土防衛説が有力で、宜昌の残留組は転進する連中から気の毒がられた。一足お先に日本へ、残留者は何とも言えない気持ちだった。

ところが当地に駐留中、上海付近の防衛配置が変更され、わが師団は密雲低迷する満州への転進が確定された。

制空権を完全に失っている日本軍は、昼間の行動を封じ込められていた。だから昼間は付近の部落に宿営して睡眠をとり、飯を炊いて食い、日没になってから動く。ふくろう部隊に変わった。

北上は続いた。三日歩き一日休みながら歩き続ける。

時には眼前の雄大な風景に思わず立ち止まって眺めていることもあった。何日かの後、黄河付近に達した。

歩きに歩くこと数百キロ。いかに剛健な肉体でも完全武装での長途の行軍は人間の力の限界に近いものだった。しかし、歯をくいしばり、分隊長として部下十二名を連れて一歩一歩とよく耐えて行軍した。

七月といえば終戦直前のあわただしい時期である。

それでも満州の天地は支那奥地の戦場から来た将兵の目を驚かせるものがあつた。「あれ、敗残兵が来た」在留邦人の目にはそのように映ったらしい。三カ月間の苦難な行軍で体は疲れてやせ細り、軍服は汚れ、靴は破れて口があき、だれの顔も垢と塵で黒ずんでいた。「やっと満州では少しぐらいいのんびりできるじゃろうか」と何年ぶりかでくつろいだ気分になり、小ぎれいな満鉄宿舎や立派な兵舎を眺めつづいた時は七月二十七日だった。

八月九日〇時、ソ連軍は突如として数方向から満ソ国境を突破して陸統と満州領内へ殺到した。ここに日本軍部の希望的な観測は完全に裏目となり、ついに来

るべき最悪の事態が到来したのだった。「総司令部は一般邦人を見すてて逃げた」と強い非難を浴びる結果となった。これは関東軍の残した最後の汚点だった。

昭和二十年八月、陸軍軍曹に任官した。いよいよ最後の決戦の時だと思った。

しかし、一部の国境に近い部隊では最後の一兵に至るまで死闘し全滅玉碎した陣地守備隊もあった。十四日の時点で、連隊本部と第二・第三両大隊は新京に、第一大隊は四平街にいた。

わが師団は陣地構築をやる計画だったが、ソ連軍と満ソ国境で一大決戦をするということで、貨車に乗り込み四平街から新京に向かった。すれ違う列車は、在留邦人（地方の人）の避難する姿ばかり。前線の激戦が想像され、我々は決意を新たにした。

第一大隊は師団司令部と共に四平街に駐留し、小学校の校舎に宿営した。数日後に広島が特殊爆弾により甚大な損害を受けたと聞き、広島出身者は意気消沈した。

ほどなく終戦の勅語を聞くに及び、到底信じられない

いことで、皆ただ茫然として男泣きした。終戦の日に四平街に達した第一大隊は、その後ソ連軍の武装解除を受け、北方数キロの楊木林に一月ほど宿営した。

軍隊手帳、貯金通帳、作戦用務令は焼き捨てた。初年兵から持っていた小銃は、菊の御紋はやすりで削ってソ連側に武器返納した。将校は日本刀だけになった。

九月下旬に四平街駅で第一大隊へ師団通信隊などが合流して梯団を組んだ。ソ連側はあくまでウラジオストク経由で日本に帰国させるというので、疑心暗鬼の中にも一縷のほかない希望を胸に貨車に乗った。貨車には糧秣を積み込み、その上にごろ寝で旅することになった。幸い砂糖袋と小豆を多量に所持しており、ぜんざいを作って舌つづみを打った。この北進間に、ソ連軍将校が大便のあと小石で尻をふいているのにびっくりし、夜、水を口にふくみ、それを手の上に吐き出して顔を洗っている姿にあきらはてしまった。

軍旗の奉焼

暗黒の新京を脱出しわずか三キロほどの地点で、圧倒的なソ連軍に包囲攻撃されてしまった。奉焼準備の

時間をかせぐため、熊野連隊副官（自分の初年兵時の教官）が、貨車の屋根に登り、白布（注・本人の言ではフンドシ）を左右に振り続けた。白布を振っている間は敵の射撃も止んだ。橘高少尉の捧げ持つ旭日の緋（濃く明るい紅色）の色も鮮かな軍旗に対し、連隊長以下が直立不動の姿勢で最後の敬礼を送った。軍旗が竿から外された。

ソ連軍がじりじりと迫り、再び射撃が始まった。わが方もまた、銃身が焼きつくほど迎え撃った。「奉焼」、連隊長がおごそかに命じた。旗手が用意していた水筒のガソリンが注がれ軍旗に火が点じられた。

なみいる将兵たちが、流れ落ちる涙の中で再び拳手と捧げ銃の敬礼をおくった。紅蓮の炎が燃え上がり、ここに歩兵第二三一連隊は悲劇的な終幕を降ろした。奉焼の間連隊旗をおくるラッパの音がよりようと鳴り、朝の雲間に漂った。時に、昭和二十年八月二十一日午前八時ころ、ひとしきり激しいソ軍の銃砲火が歴戦の軍旗を送る葬送曲となった。

八月十五日、わが連隊主力は新京にあった。終戦の

ラジオ放送はだれも聞かなかったが、その噂は波紋のように各中隊に広がっていた。

武器のない者には組織的な集団力しか頼るべき途がない。それが少人数では微弱で必然的に悲惨さを加速することになる。

毎日の労役は駅のホームでソ連軍戦利品の積み込みだった。農産物・木材・石炭などから鉄道の大釘（枕木にレールを固定する）や事務室、ついたて、いす、寝台などの家財道具にまで及び、見当のつかない量だった。参戦して一週間ほどの戦利品としては、余りにも徹底的で火事場泥棒的な根こそぎ略奪だった。鞍山、本溪湖、奉天などの大規模な工場設備も解体してドシドシ北方の本国に向けて送った。我々には嫌気がさしてきた。しかしソ連兵の銃口の前には抵抗の術もなかった。

九月下旬のある日、労働大隊は貨車に分乗を命じられ、北方行を強要された。行く先は全く不明で知る由もない。ソ連領内か、ウラジオストク経由の帰国か。ただ我々と同じように数本の捕虜列車が次々と同じ運

命をたどって北上して行った。

物資の輸送が終われば次は人間なのか。満州の秋は短い。夏衣袴の我々には朝夕の寒気がことのほか身にしみる。このままで厳冬を過ごせるはずがない。行く先の不安とともに、暗然とした気持ちで心痛の種だった。好むと好まざるとにかかわらず、威嚇の武器の下では、命ぜられたままに行動する外はない。

眼前の同胞一人も救えない軍隊、丸腰で逃げる自分、はじめさが重なって、やり切れない気持ちに沈んだ。秋風が吹きはじめるところ、作業隊が編成されて、続々とソ連領に向けて出発した。

黒河の埠頭では付近から駆り集めた満人を多数使って、満州で盗んだ物資を盗んだ船でひっきりなしに自国に運んでいる。我々は船底へ豚でも追いこむように詰めこまれ、悲喜の歴史を秘めたアムール川を渡り、二十分後にソ連領のブラゴエシチェンスクに着岸した。どこからか飛んで来た盗々と蠅のように素足でボロボロの服を着た少年たちが、我々の周囲をウロウロし始めた。ソ連軍の歩哨自身が泥棒なのだから始末がわる

い。

「さあみんな用心しろよ。リュックサックがなくなるぞ。煙草くれと蟬集する、はだしの童。土におろす尻より冷えて秋夕日」

ブラゴエシチェンスクの街では発電所の高い煙突だけが妙に印象的だった。九月中旬なので木の葉はすっかり散っていた。政府機関らしい建物だけが他を圧していた。住民は我々に罵声を浴びせ、石や泥を投げつけ、隊列も乱れがちだった。夜も寝るところではなく、燃える物を手当たり次第に集めては、天幕の下で焚き火した。体をグルグル転じながら暖まった。暖まるより冷える方が早かった。九月十八日で大吹雪の狂う異国の丘だった。よく眺めると石炭の煙の出ているのは発電所だけだった。この雪の一夜はランプで家には老人と子供だけだった。この一夜は一層我々を不安の淵に追いやった。厳しい寒さが肌を刺し、歯をガチガチならしながら天幕の中に小さくうずくまった。

住民の姿もあわれでひどくみすばらしかった。日本軍の衣服を構わず着て、大半は、寒気に、はだしだっ

た。それでも彼らは戦勝国の国民なのだ。これが戦争というものか、勝っても負けても何も残らない、そこには戦いに疲れ切った笑いのない姿が残っていない。上下二段に仕切られた貨車に、家畜の群のように乗せられた。鉄製だから寒さもひとしお厳しい。ある組ではダルマストーブもあり石炭をくべていたが、たいした効果もなかった。ソ連にだまされた、ペテンにかかったと感づいても、なす術はない。反抗は死につながる。侮しさと落胆が一度に襲い、貨車の中は寂しげで声もなかった。こうなれば頼るべきものは集団の力しかない。列車は雪また雪の果てしない広野をまる二日間も走ることもあった。走る間は食事はおろか水の一滴もなかった。

時と所とを問わず盗難が頻発した。時には、れっきとしたソ連軍の将校すらが捕虜である我々の品物に手をつけた。その心情たるや、まことに低級きわまるが、彼らには盗みの罪悪感も見られなかった。それとも捕虜の所持品を取り上げるのは勝者の当然の権利とでも思っているのか。

運命の岐路で列車はついに最悪の方向に進んだ。赤松の林を通り白樺、落葉松、もみの原始林が絶え間なく続く中を抜けて一路西へ西へと走り続ける。狭く美しい日本では想像もつかぬような雄大で壮観なものだった。たしかにシベリアは広大だ。このころになると、だれも列車の方向について口にする者はいなくなった。沈うつな悲愴感が胸を塞ぎ話す元気もなくなった。鉛のように重い空気がよどんだ。

四平街組Ⅱ第一大隊へ師団司令部、師団通信隊などが合流してカラガンダに。ソ連人はシラミを非常に恐れる。伝染病を媒介するからだ。だから彼らの入浴は一種のシラミ退治である。暖房のきいた部屋で裸になると、各人はめいめいの衣類を針金に通し、熱気消毒。部屋に運び終わった者から順々に入浴室に入る。入浴といってもシャワーを浴びるもので日本人にはものたりない。しかしシャワーの後、別室で熱気消毒したまだ熱いくらいの衣服を着けると、サッパリした感じになる。貨車に帰って見ると周囲は銃剣を着けた歩哨が警備していた。だが時計やリュックサックがあちこち

で盗まれていた。ソ連軍の輸送指揮官に捜査を依頼しても、よろしいと言っただけで品物は出てくるはずもない、彼らが盗んでいるからだ。この泥棒根性には以前から困りぬいているからだ。鉄面皮にも泥棒将校が平気な顔をしている。結局盗まれ損に終わってしまった。

吉田大隊長の指揮する作業大隊千名余りは街の郊外にある第六収容所に入れられた。ここには既に関東軍の千五百人余りとドイツ（ゲルマン）人の捕虜約二百人が先着していて炭坑作業に従事していた。

カラガンダ収容所で炭坑に入る人数調べのため、我々を五列縦隊にした。なるほど五列縦隊なら十進法で数えやすい。ところが掛け算が全くだめで加算でやるからたまらない。おまけに途中でよく誤って何回もやりなおす。時間ばかりくって、さっぱり計算が進まない。数百人以上もいるのにこんな状態ではどうしようもない。「何をしとるか！ ポリポリするな（注・ポリポリとは兵隊用語でボサボヤとかノソノソの意）のヤジがとび出す。所によっては年間のうち半分以上が寒冬の

地である。くわえて粗悪きわまる衣食住と死ぬような過酷な重労働が冷厳と我々を待ち構えていた。

カラガンダでは悪名高い囚人炭坑へもぐらされた。つまり黒ダイヤ掘りのモグラだった。宿舎になった建物はずの兵舎らしかった。個々の兵舎は平屋建て、幾棟も並んでいた。宿舎の内部は中央に通路をとり左右に上下二段のベッドが造られ、宿舎に着いた最初の夜、消灯し寝ついて間もなく首筋を虫がはいまくり、パチッと手で叩き潰すとなんとも嫌な悪臭がした。次々と何匹でも出てくるので、こりゃかなわんと、たまりかねて電氣をつけてみた。黒い虫が無数にはいまくり、柱や板の割れ目に逃げかくれする。後で南京虫とわかった。仕方なく体の周りにタル木をおいて寝た。夜が明けるとすぐ、タル木の虫を外に出てたたき落とす。柱の割れ目には木切れをさし込み、つつき落としたが、新聞紙が真黒になるほどれた。

強制労働の後、我々を丸裸にして身体検査をした。ソ連の軍医将校であった。親切な診断とはおよそ縁の遠いもので、軍医はまずケツの皮をつまんで、引っぱっ

た手をはなすと同時にもとの状態にかえるのは「アチー
ン」と呼んだ。つまり一級品である。重労働に耐えら
れる。それで身体検査は終わりだった。「ドヴァー」
は二級で地下採炭作業。「トリ」は三級で地上勤務。
「オーカー」と呼ばれた者は四級で皮がいつまでも元
にかえらない。あわれな状態であり、軽労働であった。

このように重軽作業の区分がつけられたが、困った
のは病気の判定だった。外傷や発熱は一応病人として
扱われたが、熱のない神経痛などは相手にされず閉口
した。毎日、ソ連側が翌日の作業内容と人員の割当て
を持って来た。しかし我々は長時間の輸送で体力は低
下し、気候に慣れないうえ、給与（食事）がきわめて
悪く、ともに働ける者のいない、病人ばかりだった。
ほとんど栄養失調で水ぶくれの顔をしていた。カケ盆
にオカユかオモユのような米汁一杯が一食だった。こ
れでは作業に出ても仕事にならなかった。

構内本線にはトロッコ運搬用ワイヤーが常に動いて
いる。支線の各採炭場の石炭は、ベルトコンベヤーで
本線のトロッコに積み込むトロッコワイヤーに引かれ

て坑外に運び出される。支線の坑内は両側に柱が立ち
並び、落盤に備えてあった。時には落盤もあり太い柱
が重みで潰されているのを見た。落盤のあった坑内を
はいまわったこともあったが、若かったからできたこ
とで、いま思い出してもゾッとすることばかり。坑内
で死亡した戦友も多かったろうと想像できる。

坑内ではカンテラを柱にかけて仕事をする。頭に着
ける電灯もあったが、ほとんどカンテラだった。防寒
服・防寒手袋での作業である。おまけにスコップがバ
カに大きく、栄養失調の体ではスコップ一杯の石炭を
持ち上げることができなかった。防寒服は石炭で真っ
黒になった。

炭坑の成果で給与の決まるソ連方式のもとではみる
みる体力が低下していった。そして作業率も落ちてし
まった。食糧も黒パンとなり、物差しで寸分ちがわぬ
ようナイフを入れて分けた。だれもが端の方が食いご
たえがあると言ってそれを望んだ。宿舎のベチカ（暖
炉）には良質の石炭を燃やしたが、一棟二十メートル
もある長い家屋で、両端だけのベチカでは大した効果

もなかった。

水は大八車で街へくみに行った。入浴は一月に二回の割りでラーゲルの風呂屋に行った。シャワーなので日本の風呂の気分はとも味わえなかった。帰りにタオルが棒のようにピンと凍っていた。

便所の大きな糞つぼには、文字通り黄金柱が次第にせり上ってきた。ついには尻に刺さるようになるので、時々バールで柱をたたき折った。へたをすると黄金のカケラが口の中に飛び込んだ。バールで折った糞柱を荷車に積んだ。水をかけたらすぐ凍りつき、縛りつける手間が省けた。それを野原に棄てた。部屋に帰ってしばらくすると、ジワジワ内地でかいだ肥の臭いがしてきた。つまり糞水のかけらが体に付着し、室内の温度で溶けたものだった。やがて便所紙もなくなり、支那からはるばる持参した軍票(軍隊発行の紙幣)を使った。新聞紙は貴重なものだった。

最初の一年ほどは言葉もわからず、気心も知れずで警戒兵も無茶なことをよくやった。そして我々はただ食うことだけを考えていた。冬の太陽はすごく大きく

タライのようだった。しかもピンク色で、ともに見つめてもまばゆくなかった。朝十時ごろまで日は昇らず、夕方四時には暗くなった。そして青空は見られず陰うつな毎日だった。冬服としてソ連側が支給したのは、関東軍の防寒具だった。それも二年目にはダメになり、満州軍の使った綿入れの冬服も着たし、ロスキー(ソ連の防寒服)もあってまちまちだった。夏は白夜にちかく、暗い夜は三時間ほどだった。「ヤポンスキー」と言ってタバコをくれたこともあった。しかも彼の手には一本しか残っていなかったのだ。

三年目になると現金給与を受けて、買物をする者も出てきた。しかしドイツ人はノルマを鼻先でせせら笑って時にはサボっていた。民主化するか、あるいは労働運動によって資本主義体制を崩壊させる、こんな実践人の養成だった。だれしも一日も早く日本に帰りたいかった。しかし帰国するには順序があった。第一は病人、第二には民主教室の成績優秀なもの。残余は後回しとなった。戦争中に中共軍と交戦した、というだけで戦犯とされ、ハバロフスクまで強制送還された者もいた。

我が四中隊では、和田さん、沢田さん、田淵さん、三村さん、内音坊さん、増村さん、中浜さん、川本さん、伊藤さん、ソ連で五年間、更に戦闘に参加したことのない人もいる、更に撫順収容所での六年、故国を離れてから、実に十数年間も貴重な青春を犠牲にしたこの人たちが一体何をしようとするのだろうか。

カラマンガは石炭の街である。ここから石炭を抜いたら何もない。確かに黒い所と言える。第一大隊主力はこの地区最大の第十八ピース（炭坑）に入った。作業は昼夜続行の三交代だった。つまり、三組に編成され、一組が朝八時から夕方四時まで、二組がついで夜中の一、二時まで、ついで三組が朝八時までだった。下士官は非常によく頑張り立派だったと思う。将校の大半が追放されて、部隊を離れたが、その後に至っても常に仕事面でのリーダーとなり、自分も小隊長に選出され、生産に頑張った。毎日百五十から百八十名を連れて炭坑に行き、仕事はしなかったが炭坑内をぐるぐる回った。「将校がいてくれれば」と思った。時には赤大根になり、腹の中は白大根で頑張った。ある

いは精神的な支柱となって、ともかく帰国の大きな原動力となった。

「帰国」これは抑留者にとって夢の熱望であり、片時も脳裏から離れなかった。それが本格化したのは、昭和二十四年八月。第六収容所を閉めて、帰国の途についた。二週間ほどの旅であった。ナホトカに到着、日本に帰れる実感がわいた。「なつかしい海の香りよ」ナホトカ収容所に準備のため一週間ばかり滞在した。いよいよ乗船の日、一列に並び、最後の呼点名呼、これに呼ばれなければ帰れない。名簿の読み上げを聞くのも恐ろしい気持ちすらわいた。帰国ができるか否か。これほど明暗の両極端もありないだろう。各地の収容所も大同小異で、一喜一憂した。

広場でソ連将校が祖国送還の挨拶をした。隊列は進んだ。眼前には日の丸の旗をあげた引揚船「信洋丸」の巨体が静かに我々を待っている。一步一步シベリアの地面から最後の一步を印して、かみしめるようにタラップを踏み上った。船内に入ったとき初めて、これで日本へ帰れるのだ、という実感がどっと胸をいっぱ

いにふさいだ。思わず知らず熱い涙が頬を濡らし流れ落ちた。船は間もなく岸壁を離れた。前方に見える丘、それは今ソ連の国土であり、シベリアの一端である。

我々を四年の長きにわたって苦しめ、悲惨のどん底にたたき込んだ大陸である。そして多くの戦友の生命を奪い取った大陸である。恨み深い大陸でも惜別の気持ちは捨てがたい。やがてナホトカの港は遠ざかり、我々の視界から消え去った。

三日目。だれかが「陸が見えるぞ」と叫んだ。その声に全員船上に駆け上った。夢にまで見た祖国の山野が次第に近づき鮮明になってきた。いま我々の目の前にあるのはまぎれもなく祖国、日本なのだ。ああついに帰りに着いた。ただ言葉もなく、万感胸に迫り感激の涙が静かにあふれた。

舞鶴上陸。昭和二十四年九月二十八日。五日間、調査、帰国準備をして、十月三日、生まれ故郷の瀬戸田に復員した。親兄弟と近所の人々が港まで二十人くらい迎えに来てくれた。七年ぶりの皆に、長らくお世話になった旨の挨拶をし、皆が「一（かず）さん。元気で

帰って来て、よかったなあ」と口々に言ってくださった。家へ帰り、皆に喜んでもらったが、栄養失調で二カ月養生して、三カ月目から以前岡山（玉野市）で勤務していた三井造船に再就職する。そこで同じ収容所にいた木村雪夫さんと偶然会い、苦しかった抑留生活の苦労話に花が咲いた。

永年勤務し、部下の死亡災害も起こさず、自分自身も病氣、けがもなく、運輸大臣賞をいただき、昭和五十八年三月、定年退職を迎えた。家庭では、一男一女の子供に恵まれ、内孫二人、外孫二人、皆それぞれ幸せな日々を送っている。現在では、厚生年金、恩給で老後の生活を明るく送っている。

戦争犠牲者の慰霊祭も岡山、広島で行われている。戦争は平和を唱えれば防げるほど易しいものではない。我々の体験を正しく伝え、勇気を持って日本の平和のために尽くしたいと心に誓っている。